

## 第3章

# 事業に対する評価

全世界的なコロナ禍により、内閣府の青年国際交流事業もオンライン交流の形で実施してきましたが、「世界青年の船」事業については、令和4年度の外国青年の招聘による対面交流を組み合わせたハイブリッド形式を経て、令和5年度は、日本青年と外国青年が「にっぽん丸」船内で共同生活を送りながら日本各地を訪問するという形で事業を実施しました。

日本青年及び13か国からの外国青年は、まず千葉県成田市のホテルに参集し、一堂に会しての参集式や出航前の研修を行いました。その後の船の運航に関しては、令和4年7月の「青年国際交流事業の在り方検討会報告書」を受けて、地方公共団体等との連携の下、日本国内の複数の地域に入って、「地域訪問活動」を行うだけでなく、さらに、地域の課題解決に参加青年が一緒に取り組むという考え方の「地域実践活動」も取り入れ、京都府（京都舞鶴港）、兵庫県（洲本港・神戸港）、高知県（高知新港）の3寄港地を巡る23日間の日程となりました。この間、「世界青年の船」の受け入れに関わっていただいた実行委員始め多くの関係者の方々に対し、改めて感謝を申し上げたいと思います。また、内田船長を始めにっぽん丸クルーの方々にも様々なご配慮をいただき御礼申し上げます。

今回の世界青年の船は、1月29日に東京港を出た後、太平洋側を北上し、三陸沖から津軽海峡を通過して日本海側へ出ました。能登半島沖航行時には、船上で黙祷し、令和6年能登半島地震で亡くなられた方への哀悼と被災された方々へのお見舞いの気持ちを共有しました。出発前には、冬の日本海は荒れやすいということが心配されていた中、船酔いに苦しめられる参加青年もいたものの、我々を乗せた船は穏やかな海を進むことができ、予定通りに京都舞鶴港に着岸できました。「海の京都」という、京都府北部地域の7市町をグループに分かれて訪問し、世界的に有名な「京都」のイメージとは異なる雰囲気にも触れて、それぞれ訪問した市町での特色ある体験や交流活動など有意義に過ごせたことと思います。特に海外からの青年には、日本の中の様々な地域の持つ多様性にも気づいてもらえました。

京都舞鶴港を、県・市町関係者や実行委員の方々と、到着日に参加青年が自ら色付けをしたシェードに囲われたキャンドルの火に見送られながら出港しました。引き続き穏やかな航海の中、関門海峡を通過、瀬戸内海を航行し、

兵庫県洲本港に入港しました。通船を用いて上陸した淡路島では、国生みの島“Origin”をテーマとし、伊弉諾神宮や淡路人形座などで日本の神話や伝統を感じたり、北淡震災記念公園野島断層保存館で災害について学んだりしました。これらの経験は、船内での様々な機会での振り返りや共有なども経て、多くの参加青年の中に刻まれていったように思われます。

その後、高知新港に入港し、高知県内の様々な地域を訪れる、今回初めての「地域実践活動」に取り組みました。コースディスカッションのテーマごとに様々な施設を視察し、主体的かつ建設的に意見交換を行うほか、場合によっては、地域の児童生徒など、参加青年よりも若い人とも交流したり、地域の課題についてディスカッションを行うなど、高知の実情や課題により深く関わりとともに、受け入れてくれた地域の方々や実行委員の方々にも、参加青年、特に外国青年の感じ方、考え方を聞いていただき、双方にとって多くの気づきや学びがあったと思われます。もちろん、初の「地域実践活動」として、今後の一層の進化充実に向けてさらに取り組むべきと感じられたことも多くあるのですが、実行委員の方はもとより、多くの関係者、ボランティアの皆さんの本当に献身的なご努力と、各コースのファシリテーターや参加青年の前向きな関わりと相まって、多くの成果につながったものと思います。

これらの活動と同時に、船の運行期間を通じて、船内では寸暇を惜しんで、参加青年同士での交流が日夜行われていました。国や文化、習慣などは違えど、同世代の若者同士の何気ない会話から、自らの専門性やテーマ性に基づくセミナーやディスカッション、言葉や映像だけでなく、踊り、歌などを通じた文化紹介などなど、「ONE Ship, MANY Journeys, ENDLESS Connection」というスローガンの下、参加青年だけが共有する「船」という特別な環境の中で、それぞれに創造性と工夫を凝らして将来につながる交流活動が行われていました。

最後に、参加青年にとっては、船内での短期間では消化しきれないほどの経験や交流があったと思いますが、今後もこの事業で感じたこと、経験したことの意味を、折に触れ捉え直すとともに、同期の青年同士はもちろん、長い歴史を有するSWYファミリーの一員として、ネットワークを広く、深くしてもらい、それぞれの活動フィールド、地域社会、国、さらには国際社会での活躍を期待して、締めくくりとさせていただきます。 Keep SWYing!



と思う。私は、参加した230人のPYたちの熱心さと貢献度に、大変感銘を受けた。多くのPYの行動や考え方に顕著な変化が見られていた。自信を深め、世界情勢をより深く理解し、帰国後は変化を起こそうとする熱意を高めていた。この経験によって、国際協力と文化交流がもたらす影響の大きさを再確認し、将来の世代が知恵と思いやりをもって指導する態勢を整えていることを確信した。

結論として、今年度のSWYはPYにとって、グローバ

ルな連携と文化的多様性のより深い理解につながる革新的な経験であったと確信している。にっぽん丸の船内でも明確化されたように、SWYそのものは始まりに過ぎず、私たちは学んだことやつながりをいかして、将来に渡って実世界に影響を与えることができるのである。相互連携の強化、調和のとれた世界の追求に向けて、SWYとそのグローバル・コミュニティとさらに関わり、今後も協力していくことを期待している。

## (2) 日本

ナショナル・リーダー

この度は令和5年度「世界青年の船」事業に日本のナショナル・リーダーとして参加させていただき、貴重な機会をいただいたことをとても光栄に思う。事業を通して、何度も耳にしてきた「多様性」「国際交流」を綺麗な言葉としてだけでなく身をもって体感し、その中にある難しさを乗り越えてプログラムを共創していく過程を、PY、NL、管理部や関係する人々と経験できたこと、とてもありがたく感じている。心より感謝申し上げる。

私はとりわけ、コース・ディスカッション (CD)がこのプログラムに占める意義はとても大きなものであると考えている。カジュアルな交流だけでなく各自の興味関心に基づいたより深い対話のきっかけになり、グローバル・リーダーとしての意識を育て、それぞれの社会の中に学びを還元していく大切な機会になりうると、私自身もCDに参加しながら感じた。より良いCDの場を創っていくために、2点気づいたことがある。

1点目は、CDの目的を明確化し、ファシリテーター・PYと共有して各々の期待値を調整することである。特に言語力の差によって、議論のレベルをどこに合わせるのかについて難しさを感じるという声を何度もPYから聞いた。ついていくのが難しいという声だけでなく、期待していた議論ができずにモチベーションが下がってしまうという声もあった。あくまでCDを通して言語力のギャップも含めた「ちがひ」をどう乗り越えるかに挑戦する場なのか、それとも議論の内容自体を深めることが目的なのか、前者であれば事前にその目的が注意深く共有される必要が、後者であれば自信を持って参加できる基準を再考する必要があると思う。

2点目は、寄港地活動と連携して一貫した学びの質を担保することである。特に今回は高知県での地域実践活動があったことで、CDの内容と上手く噛み合えば、船上で議論し、地域で実践的な課題に向き合うことができる絶好の機会になった。それぞれ別の学びとして独立させるのではなく、一連の学びのプロセスとして設計することができれば、CD・寄港地活動ともにより意義深いものになると考える。

また、自主活動 (VA)とピア・ラーニング・セミナー

(PLS)を通して、PYたちの柔軟な発想に基づいた様々な企画が生まれ、企画する側も参加する側も新たな気づきを得ていく様子を目の当たりにすることができた。今回はオンライン交流の期間もあったことで、対面交流を待つことなく自主的な活動を作っていく機運が生まれたことがとても良かったと思う。一方で、オンライン交流をより活発化することが、対面交流時に共に企画を作っていく素地になると感じた。例えば、各国1つはオンラインで自主活動を企画する、日本からは3つ企画するなど基準を作って、JPYは事前研修からそのアイデアを練り始めるなど、活発に交流を進めるためのガイドラインがあると良いのではないだろうか。対面交流でのPLSやVAは、ある程度事前に企画しておくだけでなく、船の上で生まれた対話やアイデアからも企画ができる余地があるとなお良いと思った。今回も短い船上期間ながら、プログラム後半にはそれぞれのクリエイティビティや専門分野をいかした活動が行われ、多様な才能が織りなす可能性をととても誇らしく感じた。安心安全な温かいコミュニティの中でPYたちが最初の一步を踏み出し小さな成功体験を積むことはとても大切であると信じている。

今回のプログラムでは公式のナショナル・プレゼンテーションは無かったが、いくつかの参加国が自主活動で行った文化紹介やプレゼンテーションはとても大切な時間になった。楽しい時間や学びの時間を共有している友人たちが大切にしているアイデンティティや誇りに思っている文化に触れるためにも、可能な限りすべての参加国に公式にナショナル・プレゼンテーションの時間を確保することができたらと思う。

それぞれが得た何よりの財産は、国境や文化の違いを越え、船で過ごすことで「家族」になったお互いの存在だと思う。そしてこの財産は、SWYに参加したPYたちだけのものではなく、この世界をより良い場所にするためにとても大切なものであると信じている。それぞれの出会いとつながりがより意義深く可能性に溢れたものになるために、立場を超えて工夫を重ね、これからのSWYがより発展していくことを願っている。

### (3) アラブ首長国連邦

ナショナル・リーダー

アラブ首長国連邦デリゲーションは、令和5年度「世界青年の船」事業に参加できたことを大変光栄に思う。世界各国の青年が一堂に会し、世界課題について議論し、協力し合えるような場を設けてくださった内閣府に感謝する。将来のリーダー育成に重点を置いた活気溢れるプログラムは、様々な国からの代表者が参加することで、より価値のあるものとなっている。私たちは船内と船外の双方における、異文化交流の貴重な機会、生涯続くグローバルネットワークの育成、受容性と寛容性のある環境に感謝している。

#### コース・ディスカッション (CD)

CDは、幅広いトピックが取り上げられる優れた方法であり、個人が自分の広範な目標に関連した最も興味深いグループを追求できるようにしていると感じた。私たちのデリゲーションでは、10のCD全てに参加することができ、その全てが多様な仲間との対話の機会をもたらしてくれた。この経験は、与えられた分野の中で、ポジティブな影響を生み出す際の共創と協力の価値を示す、驚くべきものであった。

私たちは、CDのインタラクティブ性を享受し、文化、年齢、背景を超えたグループのメンバーと直接関わることができた。また、年長のPYがグループ内で年少のPYのメンターとなる機会もあり、やりがいを感じた。CD内で行われた、様々なブレインストーミングや双方向性のある活動は活力に満ちた楽しい体験につながり、情報を魅力的に伝えることが出来るようになった。

また、寄港地活動の機会に恵まれ、現地の名所を直に訪れることで、それまで議論してきたトピックに関する実践的な知識を深めることができた。さらに、日本の様々な地域の人々とコミュニケーションを取ることで、日本の文化慣習や伝統をより深く理解することができた。

他方で、ディスカッションの時間がもう少し長ければ良かったと思う。セッションの回数を増やし、議論の時間を増やすことができれば、ディスカッションの中で浮き彫りになった重要な課題に対する解決策を考える機会を提供することができるのではないかと思う。また、CDをより大規模に、学際的なプロジェクトにまとめる、相互に関連するCD同士と一緒にディスカッションを行う機会を設けることができれば、CDの効果はさらに高まると感じた。加えて、より幅広いオーディエンスの人々と共に、グループで対話し、討論し、意思決定プロセスのシミュレーションに参加できるような一貫性のあるプログラム構成ができれば、リーダーシップや交渉力、コミュニケーション、戦略的思考のスキルを強化することができる有意義なものになると思われる。

また、PYの年齢層が広いことから、一部のCDの目的がやや不明確に感じられた。年長のPYと年少のPYの双方にとっての集団学習体験というよりも、同輩とのメンターシップの形成に重点が置かれていたように思われた。将来的には、年齢層の幅が広いCDグループを、一方は青年のメンターシップに焦点を当て、もう一方はよりハイレベルな戦略的イニシアチブについて議論することができる2つのサブテーマに分けることができるかもしれない。

#### ピア・ラーニング・セミナー (PLS) と自主活動 (VA)

私たちは、PLSとVAというPYが自身のスキルや伝統を披露する場を拡大するアイデアに感心している。加えて、これらはPYの自由と自己表現の場の創出にもつながった。PLSの特筆すべき成果として、PY同士がお互いの言語や伝統舞踊を短時間で習得したことが挙げられるが、これはPY間の一体感ある雰囲気作りに通じるものにもなった。

このようなイベントの告知をより良く管理するために簡単ではあるが、提案がある。それはモーニング・アッセンブリーのイベント告知後に全ての告知を集約するための、ソーシャル・メディア・プラットフォームでのグループを作成することである。これにより、PYの気が散ることもなく、より多くの参加者を確保することができ、宣伝プロセスも管理することができる。

#### 異文化交流

私たちのデリゲーションにとって、今年度のSWYで最も価値のあったことの1つは、他国や他文化について学び、異文化交流に参加する機会があったことであった。人々がどのようにグローバルに生活しているのかについての理解を深めるだけでなく、私たちが共に困難な世界を切り抜ける中で、互いの寛容さと相互尊重を深めることにもつながった。ただ、文化紹介では、デリゲーションが各々の言語、文化、宗教についてより多くのことを共有すると共に、全デリゲーションからもっと多くの人が参加して欲しかった。そうすれば、異なるデリゲーション間での理解が等しく保たれただけでなく、起こりうるカルチャーショックも軽減されたであろう。

#### プログラムとアクティビティ

私たちはロックダウン後のハイブリッドなミーティングやプログラムが主流である世界に生きていることは理解している。しかし残念ながら、オンライン・プログラムは柔軟性という観点ではすばらしいものの、没入できるものではなかった。プログラムに集中するために日常生

活から完全に切り離すことができるのは、SWYの最大の強みであり、実際に顔を合わせて交流する方がはるかに魅力的であると感じた。

全体的に見て、予定されていた活動の幅広さに感銘を受けた。日本のすばらしい場所を訪れたり、地元の文化について学んだりしながら、お互いに交流することができた。一方で、時々スケジュールが詰まっていたり、困惑することがあった。PYがリフレッシュする時間を設けるための休息時間があれば、心身の健康が促進され、より集中力も高められたであろう。

加えて、特定のアクティビティの目的、その活動がプログラムや各CDの全体的な学習目的にどのように合致しているのかが明確ではないことがあった。PYの全体的な学習に焦点を当てた、より効率的な活動や、日本の成

功事例を共有し、技術の先駆国としての日本の地位を追求する活動が増えると嬉しい。

### 総括

文化交流から洞察に富んだディスカッションまで、今年度のSWYは楽しく豊かな経験となった。どの瞬間も印象に残るものであり、このような質の高いプログラムを企画するために多大なご尽力をいただいたことに心から感謝申し上げる。また、今後数年で、さらに強力なプログラムになるに違いないと期待している。その時まで、私たちは新たな活力とともに、アラブ首長国連邦に戻り、学んだことをいかして、より良い、より活気ある未来を築くための活動を続けることを楽しみにしている。